

<報告> 『廣末保の仕事』 の制作を終えて

日暮, 聖

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

101

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

27

(発行年 / Year)

2020-03-24

〈報告〉

『廣末保の仕事』の制作を終えて

今日お配りしました『廣末保の仕事』の冊子についてお話しいたします。

小田切秀雄先生と益田勝実先生につづいて、三番目の企画ということで、今年生誕百年に当たることもあり、廣末保先生を取り上げることになりましたが、それを企画するにあたってはすごく迷いました。廣末先生の著作集に関しては最後のページに載せてありますが、それを担当した先輩方みなさんお亡くなりになっていて、また廣末先生と御一緒に活動された方々もほとんどいらっしやらないというような状態で、どのくらいの方が書いてくださるかもわからず、迷っていたのですが、国文学会会長の勝又浩先生に背中を押されて、企画をスタートさせました。いま無事に冊子が出来上がり、そうして良かったと安堵しています。また原稿をお寄せ下さった方々に感謝いたします。

日暮 聖

この冊子は一応、一部二部に分かれていて、一部の方は今回ご依頼して書いていただいたもの。二部には以前に活字化されたものを収めています。

著作年表は入れてありますが、廣末先生の履歴のようなものは載せていません。それについては田中優子先生の書評（93頁）に廣末先生の出身など書かれていますので、それをお読みいただければと思います。

『廣末保著作集』全十二巻（影書房）の表紙はすべて廣末先生が撮った写真から選んで表紙にしました。その中の一枚を18頁（桜の写真）に入れておきました。これらの写真のネガは大量に残されていて、映写機にかけるようにしたものなどもあり、できれば将来写真集にすることができたらいいなと思っています。

廣末先生は高知の生まれですので、土佐の絵師「絵金」をはじめて発掘、紹介されたのですが、今回同じ高知出身の高橋昌明先生が、絵金についても取り上げてくださいました(33頁)。そこに絵金の写真を入れてあります。左が廣末先生で右は編集者の松本昌次さんです。松本さんはこの冊子の原稿を依頼した直後にお亡くなりになって、残念です。写真を撮っていますのが矢田金一郎さんという写真家で、未来社から絵金の本が出ています(『絵金』幕末土佐の芝居絵『絵金の白描』)。すべて矢田金一郎さんが撮った写真です。

松本さんから、矢田金一郎さんは一枚しか写真を撮らなと聞きました。一枚だけ撮ってびたりと決まるという、たいへん優れた写真家だったということです。

72頁におあそびで入れましたが、絵馬を奉納というのでしょうか、いまは亡き岩崎さんや山本さんのお名前も入っています。これは下鴨神社の絵馬で、「右の者、よく勉強するよう御指導下されたし」と、先生が書いて奉納してくれたものです。

最後になりますが、岩波少年文庫に『ぬけ穴の首 西鶴諸国ばなし』が収められ、今年の三月に刊行されたということです。この『ぬけ穴の首』は西鶴の現代語訳というよなものではなく、西鶴の諸国ばなしを元にして先生が話しを創作したもので、小説家廣末保の片鱗をうかがわせているのではないのでしょうか。

私のタイトルを「廣末保のこの道」にしましたのは、芭蕉が「所思」という題で「此道や行人なしに秋の暮」とよんでいるんですが、廣末先生の思いに通じるものがあるような気がして付けました。

廣末先生が最後に書かれたのは説経小栗判官を取り上げた『漂泊の物語』です。それがあある意味の到達点だと思っんですけれども、ただ、廣末先生は到達点とかいう言い方はお嫌いだっただろうし、ライフワークというような考え方にも批判的だったのですが、この『漂泊の物語』は充分に読み解かれていない。このまま読まれずに埋もれてしまうのだからかと、残念に思っていました。また、指導を受けた者として、重要で難解なこの作品を取り上げる責任があるような気がして手探り状態で書いてみたのですが、他にも、瀬田勝哉先生、龍澤武さんがこの『漂泊の物語』について語ってくださいましたので、日の目を見たような気がして、うれしく思っています。

今日の機会をきっかけに、『漂泊の物語』に限らず、廣末先生の著作に興味をもつて読んでいただければたいへんうれしいことです。

付記

冊子「廣末保の仕事」の、大隅和雄先生の「広末先生の思い出」16頁の「歴検」は「歴研」の間違いですので、謝して訂正いたします。

(ひぐらし まさ・元本学教授)

